

2022 年 11 月の総評に代えて 高橋修宏

こめかみが寒い (郡司和斗 茨城県)  
どんな物語を聴いても  
眠れない体育館

何らかの災厄によって「体育館」に避難しているのだろうか。そのような夜は、おそらく「どんな物語」を聴かされても眠ることなどできない。「こめかみが寒い」という身体部に現われた極度の緊張だけが、作中主体にとってのリアリティなのだろう。だが、そのような痛ましい体験は、私たちにとっても無縁なものではないはずだ。日々、伝えられる予想を超えた自然災害や戦争の報道など、すでに災厄は目の前にあるのだから。

山裾の単線まっすぐで寒い (大橋 弘典 群馬県)

種田山頭火の自由律俳句に「まっすぐな道で さみしい」という一句があるが、本作では道ではなく「単線」に、さみしいが「寒い」へと転じられている。山頭火のような己れの人生の比喩というよりも、あくまで「単線」というモノ（物）に則することで、「寒い」という実感がシャープに切り取られている。

バファリンの表にBが彫られ冬 (長谷川柊香 宮城県)

親戚という奇妙な箱に初笑

「バファリン…」の作は、商品名を用いるという点で坪内稔典氏の俳句とも共通するが、すでに多くの人知っている国外由来の鎮静剤という点が際立っている。とりわけ「B が彫られ冬」によって、懐しさや親しみとは異なる、どこかポップでありながらクレバーで精緻な印象も伝えている。また、「親戚という…」の作は、「奇妙な箱」という断言によってアイロニカルで不思議な印象をもたらしめている。考えてみれば、つくづく「親戚」とは奇妙な存在であるが、結句の「初笑」によって円く収まっていくのだろう。なお、「箱」という一言が絶妙だ。

星明かり (松下 誠一 東京都)

のみさしの天然水が  
ペットボトルのなかをさまよう

けっしてエキセントリックな光景ではないが、結語に置かれた「さまよう」の一語によってポエジーが立ち上がる。「のみさしの天然水」が星明りに映りこみ、その広大な宇宙を「さまよう」感触を届けてくれた。

飼い鳥が欠伸の真似をしてくれて (豊富 瑞歩 茨城県)

私にたどり着いてくれた日

「飼い鳥」と「私」の間にある隔たり。それを埋めてくれたのが、飼い鳥による「欠伸の真似」だと作者は記す。「私」が受身の存在となることで、小さな生命をもつ存在が際立つようだ。生命をもつ者同士による応答を、ひとときわ尊く感じさせてくれる一作。

枯葉が地に落ちる前に掴まえて (広田 土 大阪府)

世界と境界線を引きます

なぜ、「枯葉」なのだろう。「掴まえて」という呼びかけは、誰に向けられているのだろうか。その答えは保留されたまま、「世界と境界線」を引くという振るまいが、何かを拒絶するような印象を残す。もしやすると、『ライ麦畑でつかまえて』(サリンジャー)のパロディであり、ひとつ応答であるのだろうか。

木枯に追われて記念切手買う (奎いう子 佐賀県)

前世現世肉饅頭の紙めぐり

どちらの句も「木枯」という気象や「前世現世」という概念と、「記念切手買う」、「紙めぐり」という日常的な動作や振るまいとの対比が鮮やか。身体性を伴ったささやかな動作や

振るまいを記すことで、これらの気象や概念も確かな実感あるものとして伝わってくるようだ。

白といふ色の苦しさ木棉摘む （田崎森太 東京都）

小春日に女も男もいる舗道

（9月に亡くなったゴダール…）

かつて苛酷な綿花栽培は、奴隷達による労働に支えられていたと言われる。句中の「苦しさ」とは、そんな歴史に刻まれた記憶を呼び出している。また、J=R・ゴダールの映画タイトルを取り込んだ二句目は、偉大な映画作家に対するオマージュであると共に、エスプリの効いた悼句ともなっている。

いつだって指が震えていることを （いまはじまるの 兵庫県）  
知らないでいて、友達でいて

なぜ「指が震えている」のか、ここでは問うべきではない。人それぞれのクセや性格、あるいは病歴などがあり、そのことを、そのまま受容することが、おそらく真の「友達」であるはずだから。

ほどけてく、 （こはくいろ 大阪府）  
いのちが絡まる小さな釘を  
拾う。

透明なかなしみ、  
振り子のように揺れ  
指先はまだ愛を知らない

「小さな釘」というモノ（物）に絡まる「いのち」とは、作者の「いのち」に対する、ど

こか分裂的とも呼べる意識の投影なのだろうか。また、まだ愛を知らない「指先」は、「透明なかなしみ」とのあえかな隔たりを形象化させている。そのような小さな事物や身体の一部こそ、希薄化しつづける現在の実感に対する作中主体にとっての、かけがえのない繫留点なのかもしれない。

つま先が削れた靴で駆けていた （マズルカ 山口県）  
明日熱出すなんて知らずに

二行目への飛躍が鮮烈だ。「つま先が削れた靴」と「明日」の発熱という身体的な異変。一見、何の関係もないモノとコトが、ひとつの予感のように描かれている。

がらがらと （真島しましま 千葉県）  
鳳凰堂を  
産み落とす自販機

もちろん、この「鳳凰堂」は、自販機に収まるほどのミニチュアであろう。だが、「鳳凰堂」という歴史的かつ厳しい名称により、シュールともキツチュとも言える不思議な読後感を残す。

空から、 （つけ麺 千葉県）  
星が消え  
鳥が消え  
そして終いには、  
それを記す目が消えた。

小さな詩型でありながら、悠久の時空を閉じこめている。「星」、「鳥」、そして終いには「記す目」が消え去ることで、その後の人類不在の — ある終末的な世界をしずかに暗示する印象的な作となった。